

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「近世南アジアの文化と社会：文学・宗教テキストの通言語的比較分析」（平成29年度第1回研究会）

日時：平成29年10月14日（土曜日）午後2時より午後7時

場所：東京外国語大学本郷サテライト8階会議室

1. 井田克征（AA 研共同研究員、金沢大学）「14世紀マハーラーシュトラ北部におけるマハーヌバーヴ教団について」

マハーヌバーヴ教団は、13世紀後半にチャクダル・スワーミンを祖師として現在のマハーラーシュトラ北部において成立した、民衆的なバクティ教団である。本報告では、14世紀後半までに成立したマハーヌバーヴ教団の初期聖典を参照して、そこに描かれる初期教団の姿を、特に教団外の諸権力との関わりという観点から検討するものである。

①村落社会において

マハーヌバーヴの信徒集団は、世俗信徒（*vāstikā*）と出家者（*sannyāsī*）によって構成される。世俗信徒は、世俗の生活を営みながら有力なマハーヌバーヴの出家者の弟子となり、教団への布施や施食を行う。教理書 *Sūtrapāṭh*（以下 SP）は出家者たちに対して、世俗的な生活からの完全な離脱、欲望を捨て去ることなどを説いているが、実際には出家者たちの生活は地元の世俗信徒たちに依存しており、さらにある程度は親族関係なども保持される。そうした様子は、聖者伝 *Līlācaritra* や *Smṛtisthaḥ*（以下 SS）などに見て取れる。また教理書が否定する財産の所有や、金銭の授受なども、SSなどの資料に見て取れる。

②国家権力との関わり

13世紀末から14世紀にかけては、デリーのハルジー朝が何度かデカン地方に侵攻し、最終的にデーヴギリ（現在のダウラターバード）を首都とするヒンドゥーのヤーダヴ朝を滅ぼした時期に当たる。

SSなどの資料はこのムスリム王朝それ自体については多くを語らないが、その侵攻がこの地域に大きな混乱と破壊をもたらしたことを度々述べている。聖者伝は、ムスリム（*turuk*の語で表現）が「人々を捕まえ、奴隷にする」と述べるが、これは歴史的事実にも一致する。

バットーバースが率いる最初期のマハーヌバーヴ教団は、ヤーダヴ朝の支配下にあるパイトンに滞在していた。このヤーダヴ朝のラームデーヴ王は聖者伝にしばしば登場するが、それらを総括すると以下の通りとなる。第一にこの王は、祖師チャクラダルの名声を聞いて、彼に帰依することを望む。しかし聖者伝が自らの正統性を強調する際に権威者からの称賛、帰依を主張することは一般的な現象であるから、これをそのまま史実として受け止めることはできないだろう。第二に、この王は祖師チャクラダルを呼び出して、斬首する。

第三に、王はヒンドゥーの守護者としてプラーナを尊重する。これらの記述から、王がバラモンを中心としたヒンドゥー教を重視する一方で、その頃マハーラーシュトラにおいて勃興した民衆的なバクティズムに対して冷淡であったことが示唆されるかもしれない。少なくともマハーヌバーヴ教団側は、これを正統的ヒンドゥー社会からの弾圧として受け止めている。

一方で王妃カーマーイセーは、たびたびマハーヌバーヴ教団を訪れ、出家を願い出ている。彼女に限らず、聖者伝には多くの女性信徒、女性出家者が描かれており、この新しい教団が女性や低カーストの人々を巻き込んで拡大した様子が理解される。また王妃はラームデーヴ王が崩御した後にサティーに付されるが、これに対してマハーヌバーヴ教団の指導者バトターバースは否定的な反応を示している。

### ③宗教的権威との関わり

多くのバラモンや、他派の出家者などがマハーヌバーヴに心酔し、帰依する様子は聖者伝にたびたび描かれている。そもそもこの教団は、ヒンドゥーの神格や聖典、儀礼などの権威を一切認めていないため、そうしたバラモンたちの帰依というモチーフは、正統的なヒンドゥー教に対するマハーヌバーヴの優越を主張するものと理解できよう。

一方で、ワールカリー派の宗教詩人ナムデーヴ（13ct.後半）が SS の中に登場したり、また多くの聖者伝がマハーラーシュトラ北部にあるラームテーク、マーフルなどといった聖地に人々が巡礼に行く様子を描き出している。これらの場所は現代においても重要な聖地であるが、これらの聖地への巡礼はすでにこの時期には一般的なものとなっていた。

18 世紀ワールカリー派のマヒパティによる *Bhaktalīlāmṛta* など、後代の聖者伝がスーフイー修行者やムスリムに言及するのに対して、今回扱った 14 世紀の聖者伝にはそうした存在は一切見出されなかった。この地域の村落社会においてスーフイーが一般的な存在となるのはもう少し後の時代ということになるだろう。

（井田克征）

## 2. 小倉智史（AA 研所員）「カシミール・リシ伝記群とその宗派性」

リシとは、15 世紀初頭以降、カシミール盆地の農村部で活動していたとされる修行者の集団である。概して脱俗的傾向が強く、菜食主義などの非イスラーム的修行法も採用していたとされる。集団名のエティモロジーはほぼ確実にサンスクリットの *ṛṣi*（ヴェーダ聖典を感得した聖仙）に由来するものの、後世のペルシア語聖者伝には、アラビア語語根  $\sqrt{\text{RYŠ}}$  と関連付けて、「羽毛を身に纏うもの」という意味を与える主張も存在する。

彼らの生涯を記録しているのは、16 世紀半ばから 17 世紀前半にかけて盛んに編纂され、その後も 19 世紀まで編纂が続いたペルシア語伝記群である。これらの伝記群の一部にはリシたちが詠んだとされるカシミーリー語の詩も収録されており、最初期のカシミーリー語文学の貴重な史料にもなっている。

リシの宗派的立ち位置については、カシミール人の研究者である Abdul Qayyum Rafiqi と

Mohammad Ishaq Khan の間で長らく論争が繰り広げられてきた。具体的には、Rafiqi がリシをムスリム、非ムスリム間の調和を重んじ、異種混濁的なアイデンティティを持ったムスリムであったと論じるのに対して、Khan はリシを明確にシャリーアに忠実なスンナ派のムスリムと位置付け、カシミール盆地農村部にスンナ派イスラームが浸透させた主な担い手だったとする。論争の主要な論点となったのは、リシたちの実際の活動が始まってから 2 世紀ほど後になって編纂された、ペルシア語伝記群の記述の信頼性である。

報告者はリシに関する口頭伝承が 16 世紀後半になって伝記群として書かれ始めたという事実に着目し、「語られたもの」→「書かれたもの」へとメディアの変化が起こったこの時代の政治・社会・宗派状況を考慮しつつ、ペルシア語伝記群の記述を本発表で検討した。

1570 年代に編纂された伝記的歴史書 1 作を除き、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけて、リシたちの活動を伝えるペルシア語伝記群を編纂したのは、リシたち自身ではなくスフラワルディーヤのシャイフか、その弟子たちである。時系列に沿ってスフラワルディーヤが編纂した伝記の内容を見ていくと、当初はリシに関心をそれほど示していなかったのが、徐々にリシたちとの関係を強調したり、彼らを自分たちの道統に取り込もうとする態度を見せていった様子を看取できる。クブラウィーヤやヌールバフシーヤに遅れてカシミール盆地に進出したスフラワルディーヤが、現地社会で崇敬されているものの必ずしもイスラーム的とは言えない宗教実践を行っていた人々を、イスラームの枠の中に収めて解釈しつつ利用しようとした経緯が推測される。

一方でリシたち自身も、1540 年代にカシミール地方がミールザー・ハイダル率いるモグールに支配されるようになったことで、これまで自分たちが行っていた宗教実践が異端認定される危険があることを察知して、自分たちがスンナ派に帰属していると主張する必要があった可能性もまた考えられる。

最後に、Khan がクブラウィーヤとリシの道統関係を証明する一次史料と主張する、1411 年に書かれたとされるアラビア語の教導書の内容を検討した。教導書にはアナクロにステイックな記述があり、注意深く読めばそれが後世に書かれた偽書であることが分かる。17 世紀以降にクブラウィーヤもリシたちを自分たちのタリーカに取り込もうと企み、偽の教導書を作成したのと考えられる。

(小倉智史)

### 3. 石田友梨(AA 研共同研究員、大阪経済法科大学)「シャー・ワリーウッラー『Tafhīmāt Ilāhīya』に描かれるイブン・アラビーの思想」

本発表の目的は、シャー・ワリーウッラー・ディフラウィー (1703-1762) を事例とし、インドにおける存在一性論について明らかにすることであった。イブン・アラビー (1165-1240) によって唱えられた存在一性論は、今日に至るまでイスラーム思想に大きな影響を及ぼしてきた。しかし、インドにおいてはアフマド・スィルヒンディー (1564-1624) が存在一性論の不完全性を批判する目撃一性論を唱え、当時の学問的中心地であったアラビア

半島の都市マディーナにも波及する論争を引き起こした。その後、シャー・ワリーウッラーが、存在一性論と目撃一性論を調停したとされている。本発表では、シャー・ワリーウッラーの著書『Tafhīmāt Ilāhīya』に基づき、そこに描かれるイブン・アラビーの思想を積み重ねていくことで、シャー・ワリーウッラーに至るまでのインドにおける存在一性論の継承経路と、その内容を詳らかにすることを試みた。

第一に、存在一性論の継承経路については、『Tafhīmāt Ilāhīya』の記述から、シャー・ワリーウッラーをめぐる師弟関係図を描いた。師弟間で教授された学問分野や書物についても一部明らかにすることができた。また、シャー・ワリーウッラーの他の著作の記述と合わせることで、さらなる詳細と、存在一性論が継承されたと推定される経路を示すことができた。

一方、受け継がれた存在一性論の内容については、不明な点が多々残った。『Tafhīmāt Ilāhīya』が断片集という形式をもつこともあり、イブン・アラビーへの言及があったとしても、前後の文脈からだけでは理解することが難しい。シャー・ワリーウッラーはしばしば彼独特の用語で記述しており、他の著作における使用例や意味を参照しながら解読していく必要がある。さらに、「存在一性論の継承」をいかに定義して扱っていくかについて、発表者自身の明確な姿勢を打ち出さなければならないことが、今後の課題として挙げられる。

(石田友梨)

#### 4. 全体討論

以上の 3 報告について参加者全員で質疑応答を行うとともに、①宗教者・聖者伝の叙述形式・内容の多様性、②叙述する主体、叙述される対象（である宗教者・聖者）、叙述（されたもの）の受け手（読者・聴者）という三者間の重なりと齟齬、ならびにそれらが含意すること、③思想史研究の方法論、などについてそれぞれの専門領域の知見をもとに意見を交換した。

(太田信宏)